

弘前学院の宗教教育

スクールハウスの歴史

THE RELIGIOUS EDUCATION in case of HIROSAKI GAKUIN THE HISTORY OF HIROSAKI GAKUIN SCHOOL HOUSE

坪 田 庸 子

Nobuko Tsubota

目次

はじめに

Ⅰ．弘前学院が創設されるに至る時代背景

Ⅱ．弘前学院の建学の精神

Ⅲ．スクールハウスの歴史

おわりに

はじめに

弘前学院はこの1986（昭和61）年9月27日創立百周年の記念式典を行うことができた。この百年という歴史を考える時に、本学の建学の精神は何かを明文化しなければならないのではないのか。建学の精神とは何かを本学に関わる一人一人が再確認しなければならないのではないのかとの思いに駆り立てられた。

聖愛高校では1958年以来ホームルームカリキュラムに『信仰・献身・奉仕』あるいは『正義・愛・献身』を標語として掲げ、この三つの言葉を一つずつ年間目標として、その方策を考え、実践計画を立てられ、生徒への徹底をはかっているが、大学では学則の目的の第1条に、「本学は、福音主義キリスト教による人格の完成をめざして……(Ⅱ)」とあるのみである。はたして「福音主義キリスト教による人格の完成」とはどういうことを意味しているのだろうか。本学院の元宗教主事の山鹿素氏は「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは、神である」（コリント人への第一の手紙3章6～7節）の聖句をいつも引用されたが、まさにこれこそがキリスト教教育の原点ではないだろうか。聖書のみ言葉に学びながら、その教えを伝えるのである。信仰を通して互いに学び合うことからキリスト教教育はなされていくのではないだろうか。

1969（昭和44）年に弘前学院宗教部が編集した『弘前学院キリスト教教育のしおり』にはこのキリスト教の精神とは何か、どのように実施しようとしているかが書か

れているので、少し長くなるが引用してみる。

一．キリスト教と本学院の精神

本学院は明治19年（1886年）6月25日、今から80年前弘前教会の中に誕生し、昭和25年（1950年）4月には、短期大学（英文科）が設立されました。

創立者は、本多庸一先生、教育の実務には山鹿元次郎先生が携わっておられたのです。

それ以来、キリスト教による女子教育は、伝統的精神として継承され、本学院教育の特質となっております。

二．キリスト教教育とは何か

キリスト教をバック・ボーンとする人間（人格）形成、すなわち、キリスト教信仰（日本キリスト教団の告白する信仰）による新しい人間の形成であります。それは、知的・情操的・道徳的教育と共に、霊性の教育をすることです。人間は何のために生きるのか（人生の目的）を自覚し、その目的のために、知的・情操的・意志的人格の全体を傾けて生きる人間をめざすのです。

キリスト教によれば、人生究極の目的は、神の意志を知ってこれに従い、その実現のために生きることです。

従って、まず、

○神を知らなければなりません。神は、イエス・キリストによって啓示されたから、

○イエス・キリストを学ばなければなりません。イエス・キリストは、聖書に全く現われているから、

○聖書を学ばなければなりません。聖書は信仰における交わり、教会生活を通じて正しく学ぶことができます。

これがキリスト教教育の内容の中心です。

本学院の主義として奉ずるキリスト教は、福音主義（プロテスタント）キリスト教で、カトリック・キリスト教ではありません。

三．キリスト教教育の方法（詳細は略す）

1. 礼拝
2. 聖書科とキリスト教概論
3. 献身教育
4. ホームルーム活動（中高）
5. 浅虫生活教室
6. YWCA
7. 教師と学生、生徒との個人接触（カウンセリング）
8. 寮生活

9. 教会、教会学校への出席奨励

日曜日は教会へ

——主の日（日曜日）の起源と意味——

——中略——

1963年の春までは、学校では日曜学校を開き「主の日」を守ってきましたが、残念なことに閉鎖されました。そこで、弘前学院の全学生、生徒の皆さんは家に近い所にある教会の礼拝（高校生以上）なり、教会学校に出席して「主の日」を守って下さい。弘前学院がキリスト教主義の教育をしているということは、キリスト教によって皆さんの精神が、最も人間らしい人間に形成されることを創立以来確信してやまないからです。日曜日は、学校では、一切の仕事を休み、礼拝に出席して、霊の糧をいただく日と定めているのです。

日曜日は教会へ。

こんなにすばらしい『しおり』があったのである。これを古いと人はいうだろうか。このような訴え、案内が今こそ必要なのではないだろうか。

そのためには弘前学院が創設された頃に遡って、当時の人々が女子教育のためにキリスト教教育のためにいかに心を砕いたかを知る必要があるのではないだろうか。

弘前学院90年史の「あとがき」に聖愛高校教諭の岩淵玲子氏がいる。「キリスト教主義教育における人間像の欠如が論議され、建学の精神が問われている今日、創立以来の歴史の中に、すぐれた人々をもち、その信仰の生涯をとおして、具体的にわが校の建学の精神を捉え得ることは大きな喜びであり、唯一の誇りであると思う^②」。

振り返ってみてその人の信仰の生涯を通して、キリスト教主義学校の何たるかを考えることも大切であるが、私たちは今、キリスト教主義学園に所属するものとして、日々の生活の中で明らかにしていかなければならないと思う。そこで現在、私たちが誇りに思っているスクールハウスでの「生活教室」「リトリート」について述べたいと思うが、その前にまず、100年前に宣教師たちが日本の女子の地位の向上のためにどんなにか力を注いできたかを考えてみたいと思う。

Ⅱ. 弘前学院が創設されるに至る時代背景

日本の開国は1854（安政元）年ペリー（M. C. Perry, 1794—1858）の強引な要請によってなされた日米和親条約で始まり、1858（安政5）年には幕府と米国総領事ハリス（T. Harris）とのあいだに「日米修好通商条約」および「商民貿易章程」が結ばれた。ハリスはその折衝過程において条約草案第8条で日本在留米国人の信仰行為の自由・礼拝所建立およびその保護を求めた^③。

この条約が1859（安政6）年に批准されるとともにキリスト教宣教師はわが国にやってきた。米国監督教会（Protestant Episcopal Church of U. S. A.）のC. M. ウィリアムス（C. M. Williams）やリギンス（T. Liggins）、米国改革教会（Reformed Church in U. S. A.）のフルベッキ（G. F. Verbeck）とともに米国長老教会（Presbyterian Church in U. S. A.）のヘボン（J. S. Hepburn）とS. R. ブラウン（S. R. Brown, 1810—1880）等である。彼らはいずれもキリスト教の宣教師、牧師として公然と日本に上陸した最初の人である。明治政府になってもキリシタン弾圧は解かれず、宣教師たちは日本に上陸がゆるされたのにもかかわらず、すぐにはキリスト教の伝道を始めるというわけにはいかなかった。しかし、彼らは困難と闘いながらもよく日本語の勉強をし、聖書やトラクトなどの日本語訳をこころみるなど伝道がゆるされる日のための準備に余念がなかった。しかし、キリシタン禁止の高札が撤去される前年の1872（明治5）年3月改革派教会宣教師バラ（J. H. Ballagh, 1832—1920）によって横浜公会が設立された。

ここから津輕藩の本多庸一、会津藩の井深梶之助、植村正久等が生まれ、ブラウン塾に学んでキリスト教伝道者として献身するに至ったのである。

1. フェリス女学院の場合

日本のキリスト教女子教育の草分けとして1870（明治3）年横浜にミス・キダー（Mary Eddy Kidder, 1834—1910^④）によるフェリス女学院が創立された。

ミス・キダーは、S. R. ブラウンの再来日を機に同行、1869（明治2）年8月27日横浜に到着した。初めはブラウンが新潟の英学校の教師として招聘され赴任したので、ともに新潟へ行き、日本語を学びながら、日本の少女たちに英語を教えた。1870（明治3）年7月、ブラウンが修文館の英語教師となったので、ミス・キダーも一緒に新潟から横浜に来て、山手211番地のブラウン宅に同居、ブラウンの紹介で同年9月から居留地39番地のヘボン塾の教師として7人の生徒たちに教える。翌1871年ヘボン夫妻が上海にいったのを機会に、女子教育の基礎をかためる。1872年7月ヘボン夫妻が帰国、ヘボン塾で行っていた女子教育の場を、権県令大江卓の好意によって野毛山の県庁官舎に移すことになった。さらに1875（明治8）年山手178番地に校舎・寄宿舎を落成、学院の創設と維持に尽力した本国のリフォームド教会の外国伝道協会本部の総主事の名をとってフェリス・セミナリーと名づけ、6月1日開校式をあげた^⑤。

ミス・キダーは当時のアメリカの婦人たちが理想としている敬虔（信仰心に篤い）、従順（夫に従う）、清純

(貞操を守る)そして家事^⑥がうまい女性に日本の女性もなるようにとの夢をもっていた。彼女は良きクリスチャンホームをつくることを奨励した。家庭婦人になることがどんなに大切であるを教えた。さらに自立するということは、**他人のために**^(6') 奉仕することによって自分が生かされることを理解することであるとしたのである。

宣教師によって私学が私塾の形でつぎつぎと設立された頃、1870(明治3)年2月に政府は大学・中学・小学校を含む学校計画を示した。1874(明治7)年には文部大輔田中不二磨は女子師範学校の設置を建議して、翌1875年11月女子師範学校が開校された。1881年には岩倉具視が5名の女子留学生を伴ってアメリカへ。1882年には「学制」が頒布され、東京女学校、京都女学校が設立されたのである。

1874年、青山学院の前身である海岸女学校が設立されたが、米国メソジスト・エピスコパル教会のミス・スクーンメーカーはミス・キダーと同じように、日本の風習に積極的に取り組み、日本の風習を重んじながら女子教育を行おうとした。そしてその目的は、生徒たちをよい学生で、よいクリスト教信者 good scholars and able Christian workers にするのみで、やがてよき主婦にして、よき妻、よき母となる女らしい女性 womanly women を育成することである^⑦としている。

2. 弘前学院の場合

1882(明治15)年、メソジスト派外国伝道協会^⑧(米国美以教会伝道会社)は函館にクリスト教主義女学校を開校して、遺愛女学校と名づける。

1877年メソジスト派外国伝道協会が派遣した宣教師 M.C. ハリス (Merriman Colbert Harris, 1846—1921) は1878年函館に赴任、妻のフローラ (Best Flora Harris, 1850—1909) とともに北海道における最初の伝道者となった。ミセス・ハリスは和歌を作るほど日本文学に傾倒していた婦人である。彼女は函館での女子教育の必要性を痛感、本国の婦人伝道協会の機関紙 “Heathen Woman's Friend” に投稿し、これが大きな反響をもたらし、ニューヨークのミセス・カロライン・ライトを⁸⁾ 感動させ、ライト夫人は亡き娘のために蓄積していた外貨をそっくり献金、伝道会社は他の人々から寄せられた献金と合せて、1878(明治11)年、学校創立のために最初の教師を派遣した。しかし最初の二人は健康上あるいは他の理由のためすぐに帰国、三人目の1881年来日目のミス・ハンブトン (1853—1930^⑨) が準備を整え、松山藩宇野兼三(詩人内藤鳴雪の弟)を教師として招聘した。遺愛

女学校の最初の入学者は6名、国語と英語が教授された。生徒はすべて弘前から遊学したものだ。

当時、弘前には小学校(女子ばかりのものはなかった)、中学校、男女師範学校、医学校があり、東奥義塾^(9')には女子部があった。弘前教会の本多庸一(1849—1912^⑩)牧師はクリスト教主義の教育を訴え、女子教育の必要と急務を痛感していた時だったので、遺愛女学校の生徒たちがみな弘前周辺のクリスト教信者の子女ということもあって、ミス・ハンブトンと協議の上、遺愛女学校の経費の一部を弘前教会内の女学校開設のために使用することに決定した。

1886(明治19)年6月25日、本多庸一とミス・ハンブトンが企画した女学校は米徳女学校(ミセス・カロライン・ライトの名をとって)と称して、弘前教会内に誕生したのである。米徳女学校の教員には函館遺愛女学校の卒業生があたり、初代校務担当者(校長)に青森から山鹿元次郎(1859—1947^⑪)が招かれて、これにあたった。

1887年、米徳女学校は函館の婦人宣教師の経営監督を受けていたため弘前遺愛女学校と改称した。その頃、弘前教会の関係者は弘前遺愛女学校を本格的な女学校にすることを熱望、南津軽郡藤崎在住の熱心なクリスト教信者である長谷川誠三(1889—1910、酒造家)もまた女子教育の必要性を痛感していた。そこで同志を募り、長谷川誠三らが発起人となって「女学校設立趣意書」を配布したのである。この趣意書は女子教育の必要性を正面に出し、クリスト教主義であることは明らかにされていない。この趣意書に賛同して資金を寄せた人々は126名、長谷川誠三は女学校設立結社人代表として、寄付金をもとして校舎を新築。校舎だけでは女学校は成立しないので、婦人伝道会社と契約を結んだ。この契約書(互約書)の第一として、

婦人宣教会社は本校の爲め一名の女教師を選任し、且同会議高を以て経費を補助せらるるを以て、本校教育の主義を基督教に取り、教育主権、学科制定、校則の認可、結社人会の会長、学政会の議長等の権を女教師に捧呈すべし^⑫。

と、ここで初めて弘前遺愛女学校がクリスト教主義の学校であることを明記しているのである。

1889(明治22)年5月、長谷川誠三は学校名を弘前女学校として、設立願を青森県知事鍋島幹に提出、一週間後の5月28日に認可があり、いよいよ開校となったのである。弘前女学校^⑬の場所は弘前市元大工町1番地、学校の目的は「智徳併進を旨とし女子に高等及普通の教育を授け善良にして有用なる婦人を養成す^⑭」としたのである。

このように明治の初期から宣教師たちや多くのクリス

ト者たちの熱烈な善意と祈りと浄財とによって女学校は設立された。女子教育は次の時代を産むものは母であるという考え、どんなに偉い人であっても母があればこそであるから、女子の教育は重要であると考えられたのである。その母を内側から成長させるものとしての信仰（祈り）を教えることを宣教師たちは決して忘れなかったのである。

Ⅲ．弘前学院の建学の精神（目的）

弘前学院がキリスト教の精神に基づいて教育がなされていることは周知のことであるが、ここで、『弘前女学校歴史』や『弘前学院90年史』を見ながら具体的な方針がどのように変わってきたか、あるいは少しも変わらなかったかを確かめたいと思う。

1922（大正11）年4月、東奥義塾再興の日、「講堂には〈敬神愛人〉の本多庸一の額が掲げられ、基督教教育による精神教育の門出がなされた」とある。また、遺愛女学校の場合は、「遺愛女学校の三大精神」として『信仰犠牲奉仕』がある。

遺愛女学校の三大精神について1919（大正8）年4月同校の新内岩太郎幹事が新入学生のために行った講話によると、

本校には開校の当初より校長を初め職員生徒一同の、深く厚く日夜に服膺せざるべからざる三箇の信条がある。之を3S主義という。校風も之に振蕩し、修養も之に依りて向上すなれば之を遺愛の精神という。

何をか3S主義とするか 一に曰く信仰（Shinko）二に曰く犠牲（Sacrifice）三に曰く奉仕（Service）一を邦語、二を英語にて言え 三者何も頭にSの付いて居るを見ん、由りて之を3S主義というのである。

其一 信仰

信仰、英語にて之を（Faith）という。正義の神、慈愛の神、父なる神を信仰する事である。信仰は自らが自らの力を信ずるといふ所謂確信にあらずして神を信ずる事である。人に依頼するにあらずして全能の父なる神に依頼する精神をいうのである。

——中略——

信仰は第一に誠実なり、第二信頼なり、第三に実行なり、三者其一を欠く時信仰というとも本当の信仰ではないのである。

其二 犠牲

犠牲、英語にて之を（Sacrifice）という。

——中略——

要するに犠牲とは己の凡ての快樂を神又は他人に献ぐる事である。「若し我が兄弟、我が骨肉のためにならんには我自ら^{わが}祖^{わが}わられてキリストに棄てらるゝも亦願ふ所なり（ロマ9の3）とはローの犠牲の精神である。

——中略——

「人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はな

し（ヨハネ15の13）」と教え給ひしキリストは十字架にかゝり給えり。我は己が身を神の悦び給う潔き活ける供物として献げねばならぬ。信仰生活とは取りも直さず犠牲の生活で、家庭にありても、学校に在りても、社会に出てもこの精神を欠いてはならぬ。

其三 奉仕

奉仕、英語にて之を（Service）という。

——中略——

信頼の生活、献身の生活に加えて、全く神意に服従奉仕する生活である。即ち神の霊を己に宿し新しき人となりて活動する事である。神の霊を受けんとせば、

第一 祈禱が必要である。誰でも自分は此処に一人で立てて居るのではない。自分の向い側には神がちゃんと立って居ると思うたら自分の心の底から何かの思が自ずと湧き出て、その神の方に動いて行かざるを得ぬ、それが祈禱である。——略——

第二 讚美、この天地に我一人あるにあらず、神ありと思ひ、神は天地を斯く宏大に、かく美わしく造り給えりと思ひ、神の力、神の知恵、神の徳はこの大天地の全体より小さき物までも充滿している事などを思う時には我等は覚えず「ああ神の知識の富は深いか（ロマ11の13）」と讚嘆せざるを得ぬ。

第三 感謝、神が在って世界の万端に働き、自分の凡てを導いて居る事を思う時には、其摂理の慈愛なのに感謝の心が起らずには居られぬ。

——中略——

第四 懺悔

——中略——

第五 静思、奉仕の生活は静思である。静かに思いを凝らして神に念じ、キリストを受ける用意が甚だ大切である。

——中略——

第六 聖書、聖書を読み之を思う事によって神の子の姿は益々円満になり、神の子の面目が現われて来るばかりでなく、神、キリスト、聖霊の内容がよく分ってくる。之がために聖書の教授は本校の最も重大なる学科で、他の高等女学校と異なる点は全く此処にあるのである。

第七 直接の奉仕、直接に神の為に活動する事である。毎日毎週、時を定めて礼拝しなければならぬ。又神の国の為になる事なら大いに努めなければならぬ。

——中略——

結尾

以上信仰、犠牲、奉仕を本校の三大精神という。学校に寄宿する者と家庭より通学する者とを問わず日常の生活は凡てこの三大精神を実現する事の校風の基礎たる事を知らねばならぬ。

長々と遺愛女学校の三大精神について引用してきた訳は、この三大精神こそが多くのキリスト教主義学校の建学の精神となっているものだと思うからである。もし現在もこのように事こまかく解説されているならば、そしてこのことが生徒・教職員一人一人に浸透しているならば、学校は勿論、世の中も住み心地の良いものとなっているのではないかと思う。この三大精神はキリスト教主

義学校のものだけとは限らないと思うのである。さて、弘前学院の場合はどうであろうか。

前述のように1888年、長谷川誠三が女学校設立のための趣意書を配布したが、その趣意書は、

「女子は文明を生む母なりとは両哲の確言なり。故に社会の進みたと進まざるとは其の国女子智徳の多寡を以て測ることを得べし。——略——

女子の教育国家の汚隆に関する大なり。社会改良に志あるもの宜しく精慮其の法を講ずべきなり。百事維新の今日に当り、女子教育の風潮満天下に漲り到处蝶々其利を論ぜざるなく、僉大野蘊も其の必要を知りて淑徳の教師を迎え完備の女学校を設くるを以て急務となせり。——略——

嗚呼慈善の淑嬢紳士諸卿其妹娘の教育を完うして文明の母たる敬礼を受けしめ、其の児孫をして孫仲謀たらしめんこと生等が偏に冀望する所なり。」

とあるが、設立趣意書の同志たち者の多くがキリスト教信者であったにもかかわらず、キリスト教主義であることをうたっていないのは、当時はキリスト教に対して反感を持つ人も少くはなかったから、一般人からの寄付金が少なくなるのを懸念してのことだと思うのである。その後長谷川誠三が米国婦人伝道会社と交わした『互約書』（1889(明治22)年)には「本校教育の主義は基督教に取り……」とあったことは前述の通りである。

1893(明治26)年11月、弘前女学校は規則を改正して、これまでの高等小学科を廃して、尋常小学科(4年)、予科(4年)、本科(2年)とし、べつに手工科専修のための選科(1年)を設け、定員を100名とした。ところが、これが認可を受けるとき、教則第5条として申請した「女子ノ徳性ヲ発達セシメン為附加科トシテ基督教ノ聖教ヲ授ク⁹⁹」は許可にならなかった。県知事佐和正は教則改正は「願之趣聞届^{さく}ク」としながらも「但教則第五条並課程表中附科ハ之ヲ削除スヘシ」と但し書きが付いてきた。これに対して弘前女学校側からは、キリスト教教義を教授することは当校の重要学であるから、これを削除することは撤回してもらいたいと、再三県に対して申入れをしている。

教育と宗教の分離が、政府の方針¹⁰⁰として明瞭に表示されたのは、1899(明治32)年であった。それによると官公立の学校においては、いかなる種類の学校を問わず、宗教上の教育ならびに儀式の挙行は一切許されないことになった。私立学校の場合は小学校、中学校、高等女学校のように、学科課程に関して法令の規定のある学校は宗教教育はできないが、私立の専門学校のように、学科課程に関して別段法令の規定のない学校では、宗教教育ができるのである。

弘前女学校の場合、尋常小学校は宗教教育はできない

が、予科や本科は独自の学科課程により、高等女学校令には規定されていないため宗教教育ができたわけである。弘前女学校は本多庸一がキリスト教伝道をも考えて創立した学校であるから、学校教育を通してキリスト教信者を育てることも一つの目的であったのである。

弘前女学校の設立者であり、校主であった長谷川誠三は、1905(明治38)年頃から信仰上の理由で弘前女学校と訣別していたが、弘前教会との話し合いによって、学校設立者を変更することにして、1910(明治43)年3月本多庸一が学校設立者となった。それとともに学則変更が稟議され、同年8月武田本県知事によって認可された。その際の学則第一条に基督教主義教育であることが明記されている。

私立弘前女学校規則

第一章総則第1条 本校ハ女子ニ須要ナル教育ヲ授ケ
基督教主義ニ基キ人格ノ発達ヲ図リ家庭及社会
ニ有用ナル淑女ヲ養成ス

第二条以下——略——

1912(明治45)年3月23日本多庸一は長崎出張中にその地で亡くなった。そこで学校では校地校舎の一切を米国メソジスト教派の婦人伝道会社に寄付した。その結果1912(明治45)年7月18日から、婦人伝道会社の代表者ミス・B・アレキサンダーを設立者兼校長として、弘前女学校の経営は弘前教会が行うことになったのである。

1915(大正4)年、学則変更が小濱本県知事によって認可された。そしてその学則には教育勅語がもられているのである。

「第一章第一條 本校ハ基督教主義ニ基キ教育勅語ノ聖旨ヲ奉シテ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ授ケ家庭及社会ニ有用ナル淑女ニ養成スルヲ以テ目的トス」そしてその年の生徒心得には、

一、畏神愛人ノ本旨ヲ遵奉スベシ

二、勅語ノ聖旨ヲ奉體シテ忠孝ノ大道ヲ実践スベシ

三、以下 ——略——¹⁰¹

ここに東奥義塾が再興された日に本多庸一の額<敬神愛人>が掲げられたという、この言葉と同じ様な言葉が入っている。この言葉が何故選ばれたかの説明がないので理解しがたいが、ここで初めて基督教主義に基づくということの具体化した目標が掲げられたのである。

1934(昭和9)年県学務部に対する「学校の徽章、校訓等に関する件」についての回答によれば、(一)本校の徽章について—1915年11月10日に岩木山を校章として制定(校旗と共に)したが、その由来に「岩木山は本校舎の正面より、よくその秀麗なる山容を眺望なし得るが、生徒が登校しこれを眺望するとに心氣自ら新らたにし、

その心性陶冶に資すること大なるを覚え、この山容をとって徽章とせり」……とある。

(二)校訓について

①校歌の歌詞に示される精神

②畏神愛人

③思想を穩健にし、感情を純潔にし、意志を堅固にし、容儀を端正にし、言葉を温雅にし、以って淑女的品性を養うこと……の三項を主なる校訓とする。

1934年の県学務部に対する回答によって、弘前学院の校訓が確認された。弘前学院の建学の精神はここに、この『畏神愛人』神を畏れ、人を愛すことに凝縮されていることが理解されたのである。この校訓が受けつがれ、1958年からのホームルームカリキュラム委員会による高等学校標語『信仰・献身・奉仕』が設定されたのである。

この『信仰・献身・奉仕』は次に述べるスクールハウスでの生活教室・リトリートによって具現化されることになるのである。

Ⅲ. スクールハウスの歴史

弘前学院スクールハウスの歴史

- 1959年7月 幼稚園の建物を移築して、青森市野内大字浅虫字蟹谷 199 の1に完成。
- 1960年4月 中高生、生活教室始まる。参加費@400円。
- 1963年12月 弘前学院浅虫生活教室機関誌『みぎわ』発行。
- 1968年 参加費@700円。
- 1969年3月 『みぎわ』第2号発行。
- 1969年5月 浅虫生活教室開設10周年記念礼拝。司会—平山採子、奏楽—西谷世紀子、説教—野呂幸子。
生活教室の歌発表。
PTAの補助によってバスで往復する。
- 1970年3月 『みぎわ』第3号発行。編集担当—生活教室専任教師平山採子。
- 1970年5月 スクールバス「のぞみ号」購入。
参加費@1,200円。
- 1971年4月 4年制大学開設にともない、短大・大学では従来の「浅虫生活教室」を「浅虫リトリート」と名称を変更。
- 1971年 参加費@1,300円。
- 1976年6月 参加費@1,600円。
- 1976年9月 浅虫スクールハウス売却。
- 1976年11月 浅虫スクールハウス納め式。

- 1977年4月 岩木青少年スポーツセンター（中郡岩木町常盤野字湯段1の2）借用。
参加費@1,800円。
バレーボール、バスケットボール、卓球、岩木山登山（中腹）まで出来るようになる。
- 1977年5月 中郡岩木町百沢字小松野に約800坪の土地を購入。
- 1977年10月 二階建て総建坪190坪のスクールハウス建設に着工。
- 1978年5月 岩木青少年スポーツセンター借用。
参加費@2,000円。
- 1978年6月 スクールハウス献堂式。
- 1978年7月 7月19日から4日間、サマーキャンプとしてスクールハウス周辺の整備（グリーンベルト、溝掘り、土留め、橋作り）を実施。
- 1978年10月 生活教室、リトリートをスクールハウスで開始。食事の準備は炊事婦を頼まず、労作の一貫として学生たちが担当する。
- 1980年5月 ドイツ人牧師アーノルド・ルスト氏参加。
- 1981年4月 スクールバス「めぐみ号」購入。
- 1982年5月 参加費2,300円。
- 1984年 豪雪のため屋根が壊れ、また、ボイラーも使用不能となり、5月から使用。
- 1984年10月 ドイツ人宣教師グルーヤー氏参加。
交換留学生ジュディ・ドラグーさん参加。
- 1985年 参加費2,500円。
- 1985年3月 隣接地の森林約1,800坪購入。
- 1985年5月 スクールハウスのまわりにななかまど、山吹、しらかばを植える。
- 1985年8月 トイレを水洗化する。
- 1985年10月 交換教授シャノーワー夫妻参加。
- 1986年9月 隣接地の森を整備して「めぐみの森」の石碑を設置、野外集会場にはヒバのベンチを設置する。

1. スクールハウスが建てられるまで

聖愛中高での夏季修養会について記録されているのは『弘前学院90年史』に1956(昭和31)年7月26日から高山稲荷神社で中高夏季修養会が行われ、中学校の講師は今泉三郎牧師、高校は東北学院大学教授赤城泰氏（現遺愛学院院長）とあるのが最初であるが、『弘前学院八十年記念小誌』には卒業生の思い出として昭和27年8月、中学2年生の生徒が、当時下級生は4名に限られていた高山稲荷神社での修養会に参加したことが記されている。「もしも、もう一度出席させていただけるなら高山の海岸に行き、海鳴りを耳にしながら創り主の偉大さ、人間

の脆さ、生きていくことのすばらしさを話し合いたいと思います。それ以来毎年修養会に参加させていただき全国カンファレンスにも出席させていただきましたが、やはり初めての修養会である『高山』のことが強く思い出されます²⁴。当時中高一緒の行事が多く、中学1年、高校3年というよりも1年生、6年生という言い方をして下級生は上級生の指導のもとに、素直に見慣って学校生活を送っていた。上級生が礼拝の指導、合唱の指導を率先して下級生に手本を示めてくれていたのである。

さて、短期大学の修養会に関する記録は、

- 1956（昭和31）年7月11日、夏季学生修養会を湯段温泉にて開催、講師は吉村庄一牧師。
- 1957（昭和32）年7月25～27日、夏季修養会を板留中学校で開く。
- 1958（昭和33）年7月21～23日、夏季修養会を温川温泉で開く。講師北海道大学文学部長中川秀恭教授。
- 1959（昭和34）年7月27～29日、夏季修養会を十二湖で開催とある。このように点々としながら夏期修養会は続けられ、1959（昭和34）年8月、ついに念願のスクールハウスの献堂式が浅虫の地で行われたのである。

2. スクールハウスは何故建てられたか

1963（昭和38）年12月に発行された『みざわ』第1号には元院長の小田信士氏、高杉英男氏、元宗教部長の山鹿素氏、そして宣教師のバースンズ氏が、それぞれスクールハウスが建てられることになった理由を述べている。それによると、浅虫が選ばれたのは、近くに海があり、山があったからであるという。それも海のそばに決定したのは生徒達の希望を入れてのことだというのである。旧約聖書の詩篇136篇に、ダビデが山や美しい自然の中に、神のすばらしい創造の業を見出し、力と勇気を与えられたと書かれてある。又、新約聖書のマタイによる福音書13～14章には、イエスが海辺を歩かれ、あるいは山で時を過ごされたとある。イエスは心を鎮めて祈ることによって、精神を新たにされるために、静かな場所を好まれた。神は、イエスが必要とされる助けをいつも与えて下さったように、私にたち対してもさまざまな問題や毎日の単調な生活あるいは多忙な生活から解放され、さらに神に近づいて、精神を新たにできる場所としてスクールハウスを用意して下さいのだと思うのである。マルコによる福音書第6章31節には、イエスは使徒たちに人々を避けて寂しい所に行って休むように命じられたとある。なぜならば、使徒達が食事をする暇もないほど忙しかったからである。私達もまた、しなければならぬことが沢山あって、非常に忙しい毎日を送っている

が、どんなに忙しくても、イエスが人里を避けて祈れたように人々や仕事を避けて心身を新たにすることを怠ってはならないのである。

スクールハウスは開設以来多くの人々に利用されている。一人一人が心を鎮め祈り、自分を取り戻すためにこのような場が必要であることを自覚しなければならないと思う。私達の身体が、健康と力のために食物が必要であるように、私達の魂もまた、信仰を深め、精神的に強くされるために霊の糧を必要とするのである。私たちは心身ともに英気を養ったら、再び人々の中に戻り、人々とともに生活し、学び、働くのである。神がして下さるすべてのことを覚え感謝しながら日々を過ごすように励みたいものである。

次に、1963年12月22日発行の『みざわ』第1号に掲げられた「生活教室開設の動機と意義」を参考のために転載する。

生活教室開設の動機と意義

山鹿 素（弘前学院宗教主事）

- I. 動機 外的動機 毎夏、宿泊施設や旅館を借りて行ってきた修養会を学校の施設で行うと年間の計画次第では全校生徒を順次収容、教育することが可能となる。

内的動機 マス教育の害悪から、本学院の教育を護る。

- II. 意義 1. ホームルームの深化、発展の場としての意義。
- 2. カウンセリング関係の場としての生活教室。
- 3. キリスト教教育の場としての生活教室

生活教室実施要項

- I. 目的 年間、各学級毎に一回、教師と生徒が浅虫スクールハウスで生活を共にし、生活を通じてキリスト教による人格陶冶に与かり教師と生徒とに親密な人間関係を助長することによって本学院の教育精神を徹底させること。＊中学校一泊二日、高校二泊三日の日程

II. 生活内容

礼拝、祈禱会、ディスカッション、子供会ロール・プレイ（ディスカッション導入の為の寸劇）、作業（花壇作り）、見学、遊覧、運動、レクリエーション、クッキング実習など。

Ⅲ. 指導者

院長・宗教主事・宗教主任・学級担任・生活教室主任、係3名（炊事担当者2名）

Ⅳ. 企画運営

A. 企画は上記指導者に教務主任・学年主任が加わりこれに当たる。

B. 実施は上記指導者が全体責任者・交通・炊事指導・書記・会計。運動・生活指導などの任務を分掌してこれに当たる。

Ⅴ. 経費 一年目 400円、二年目以降 450円（旅費改正による）

（予算 旅費150、食事190、茶菓30、雑費80）

4月から隔月4回に分けて学校会計に納入、但し不参加者も協力費として200円負担する。米・野菜・調味料は各自持参。

Ⅵ. 主題 年間ホームルーム主題と共通

3. 生活教室10年の歩み（聖愛中・高校）

1970年3月に生活教室10年を記念して発行された『みぎわ』第3号の元聖愛中・高教諭野呂幸子氏（現成美学園教諭）の記録によると、

- ① 1959年スクールハウスまでの7年間の祈りの時
- ② 1960年生活教室開始から1962年までの3年間（5日制で日曜学校が存続、中1を除く全学年が実施）
- ③ 1963年以降は学力向上、授業日数確保などの理由から日曜学校廃止、6日制となる。さらに、高校生急増期にかり、学年のクラス数増加によって、全学年実施という目標から遠ざかる。
 - (i) 1963年～1966年の4年間という長い期間は模索の時。以前においては、生活教室はその目標の3項の中で「キリスト教教育の場」としてを他の「ホーム・ルームの深化発展」や「カウンセリングの場」であることよりも優先していた。かつての全校生を対象としていた修養会に準ずる拡大されたものとして受け入れられていた。草創期の熱情は学校行事に流されはじめた。2泊3日に、引率者の削減など、数の増加は質の低下へと数々の影響をもたらした。
 - (ii) 1967年～1969年「ホーム・ルームの深化発展の場として」生活教室が強調されることになり、この間は、各ホーム・ルームの自治活動を推進するために専任の生活教室担当者（教師）による指導となった。

このように10年の間にスクールハウスの利用目的も徐々に変化している。このような中であって、キリスト教教育はどのように実施されたのだろうか。学校での（教室での）授業とは異なり、各ホーム・ルームの自治を生活の基盤として展開されるようになった。即ち、少なくとも、そこでは教師の指導が前向きにでるよりは、むしろ

ろ寝食を共にし、学生生徒そして求道者であるということである。そしてその生活の大きな要素であり、一つの明確な願いは、各自がキリストによって目を開かれるような願いに基づいて持たれるさまざまな形態の対話によるのである。話し合いを通しての相互理解から生まれるものである。

さて、第一回目の生活教室の様子はどのようなものだったのだろうか。

毛布やくずかごなど生活に必要なものがほとんど備えつけられていなかったスクールハウスで、自分たちがプログラムを作り、「愛と負いめ」というテーマでの2泊3日、ディスカッションの他に近所の子どもたちを集めて子ども会をしたり、病院の慰問に行ったり、それぞれが与えられた仕事を責任をもって行ったということである。

1964年までに中3、高1、高2、高3と4回の生活教室を経験した生徒の感想文によると、

「4回の生活教室で思い出すのは食事である。それもあのどんぶりにもられたどんぶりめしなのである。そして、浅虫と思うと、なんだか巨大などんぶりめしに追いかけているような錯覚におちいるのである。たしかに長く続いたはずの講話やディスカッションの時間があつというまにすぎ、朝食、昼食、夕食の時間が倍も長く、食事の時間だけが一日をしめていたように思い出されるのである。私たちの生活は、一貫して食べて、聞いて、話して、のくりかえしの生活だったように思う。このようなプログラムによる生活も、たしかに生活であろう。しかし、私はこのような生活は生活教室の真のあり方ではないと思う。例えば食事について、他人が作り他人がもりつけた料理を緊張しつづけてくたびた胃袋に投げ込んでいるにすぎない。当番制にして、時には、こげたごはん、あるいは塩けの足りないサラダを、自分たちなりの考えで自分たちの労働によって作り上げるところに意義があると思う。

「聞いて、話して」にしてもこのままでもいいのだろうか。「先生、講話の時間です。おいで下さい」の言葉に始まり、終る、講話の何分間。確かに顔をつきあわせている。終ると同時に、二階と一階とにわかれてしまう。これでも共にある生活といえるのだろうか。どこまでも“先生”であり“生徒”である。絶対にそうなのだ。天地がころころが現在あなたは先生であり私は生徒である。同じ場所で寝、食事をし、同じ時を過ごしても変わらない。5～10分の休み時間を生徒との実のないおしゃべりで過ごしていても、そこには厳然とした差別がはっきりついている。先生、どうぞ私たちと共に生活をして下さい。そして白紙で生徒を知り、理解して下さい。又、私たちも共に理解していきたい。先生と生徒の親しい交わりはできないものだろうか。」

この中の反省するべきことは、百沢に移ってからはずいぶん改善されたと思う。この浅虫での生活教室は、炊事のおばさんを2人雇っていたので、食事作りの時間はディスカッションにまわすことができた。ディスカッ

ョンの時には津軽地区や南部地区の教会の牧師に応援していただいて、開会礼拝に続いて行われる学生の発題に基づいて3～5時間も話し合われたほど盛り上ったということである。

1964年からスクールハウスでの献金が始められた。寝る場所、食事をする場所、礼拝をする場所、ディスカッションをする場所、ゲームをする場所、すべて一つの場所であったため、椅子・テーブルのある礼拝堂兼食堂が建てられるようにとの祈りをもって献金は積み立てられた。この献金は後に百沢のスクールハウスが建てられる時に貴重な資金の一部となったのである。

4. 大学・短大のリトリート

(百沢のスクールハウスができるまで)

短大では1961(昭和36)年5月から浅虫生活教室が始まった。1年生は春、2年生は秋にクラスごとに実施されたのである。

1971年、四年制大学が開学されるとともに、「生活教室」は「リトリート」と改称された。前述のスクールハウスへの祈りが実現することになる。しかし、「リトリート」という名称はなかなかなじめず、毎年「リトリートとは何か」の解説がなされた。

『「リトリート」とは、退修会といい、日常生活の場から退いて、静かな山や海辺で神について瞑想し、人生について、学問について、学生としてのあり方について、社会問題、職業、結婚などについて語り合う場なのです。』と。

リトリートは新入生にとっては、特に大学についてのオリエンテーションを兼ねる場であり、上級生(2, 3年生)にとっては専攻の学科について、あるいは将来の進路、就職、結婚、家庭などについて語り合う場となったのである。

浅虫のスクールハウスが売却されてから百沢のスクールハウスが建てられるまでの一年間、岩木青少年スポーツセンターを借用して「リトリート」は続けられた。ここでは従来のプログラム(礼拝、ディスカッション等々)の他に体育館でのバスケットボール、バレーボール、バトミントンなどのスポーツ、野外での散策、小登山(岩木山の中腹まで)などができ、山菜取りをして食卓に添えたりすることができたのである。

5. 百沢スクールハウスでのリトリート

1978(昭和53)年、念願のスクールハウスが完成したのは6月。6月30日の献堂式の時、当時の学長だった田島信之氏(現東洋英和女学院院長)は式辞で「弘前学院のスクールハウスはキリスト教教育の場として、1959年

7月浅虫に建設されて以来、弘前学院の大切なバックボーンとなって来ていると信じます。」と述べている。

大学・短大宗教部ではこの建物・敷地が与えられたことを感謝して、その年の夏のサマーキャンプをスクールハウスの環境整備のために「スクールハウスに最初の足跡を!!」と「労作キャンプ」を計画、参加者を募った。

1978年7月19日～22日の3泊4日、参加者は学生23名、教職員7名、教職員の中には弘前大学の太田敬雄氏(現新島学園短期大学勤務)に応援を願って無事実施することができたのである。このサマーキャンプによって私たちは私たちの労作教育＝宗教教育の第一歩を踏み出したのである。

労作について

玉川学園前総長小原國芳は「『労』は万人、額に汗して働くべき『一日不作、一日不食』の境地。『作』は単に作業の作ではなく、創作の作です。働くことが万人の喜びであり、誇りであり、義務であると思う私は、労の字を使いたい。頭で働くか、手で働くか、足で働くか、胸で働くか、ペンか、鋤か、ハンマーか、ソロバンか、それぞれ異なりはしようが、万人はみな精一杯労働せねばならぬのである。」と常々私たちに教えて下さったものである。

労作は単なる職業指導や勤労や生産のためであってはならない。自己の真我発揮のために、自己の人間性を磨くためのもの、すなわち人格形成のためのものでなければならないと思う。そのためには一つ一つの労作が、道徳的修練であり、宗教的な陶冶でなければならないと思う。

労作といえば、弘前学院では1945(昭和20)年代に学校農園で畑を耕やしたことが記録されている。甘藷苗、小豆、大豆等を植え、収穫物は全校生徒、教職員で分けあったという。山の上で礼拝を守ってから作業にとりかかる。当時の状況からすると農作業が行われたことは当然のことであったかもしれないが、労作教育が40年も前から本学院でも行われていたことの発見はうれしいことである。

労しみ、作り、体験し、為し、試み、考え、行うことによって、真の教育に達することができると思うのである。実に1978年のサマーキャンプはこれを体験したのであった。

このサマーキャンプの実行委員の報告と、参加した学生の感想文をここに引用してみよう。

「ハウスの周囲の整備を目的とした労作キャンプであった。そのため、毎日のプログラムには労作の時間が組み込まれてい

た。作業は、グリーンベルト、土留め、溝掘及び橋作りの三つにわかれて行われた。じっとしているだけで汗まみれの中で土と取りくんだ。実際の作業は頭の中で安易に考えていたものと比べものにならないほど辛く、暑さも加わり、数倍も苦しかった。だが弱音を吐く者がいなかったのは、苦しい作業の中にあっても何かを深く感じとっていたからだと思う。働いて疲れたあとのレクリエーション、バーベキューパーティ、花火大会等、疲れ果てて、めいりそうになる気分を随分盛り上げてくれたし、『宗教とは』という題のディスカッションでは気持を引きしめ考えを新たにしてくれた。橋ができ上り、皆がその上を渡ったときの感激は筆舌につきぬものがある。我々の労作は、だからも顧られるものでも感謝されるものでもない。むしろこの先、ハウスを使用する人の多くはハウス周辺が整備されていることを当然のことと受けとめることであろう。無償の労働を悔いた人はいないはずだと確信している⁸⁸」

と、実行委員は宗教部が願い、計画していたことをそのまま、素直に受けとめてくれたことは大きな驚きであり、感謝であった。呼びかけに応じて参加した学生の一人は、次のように述べている。

「労作、まさにこのキャンプはこの一言に注がれていた。先生も学生もない。参加者はすべて労働者なのである。各班の敏速な作業のもとに仕事は着々と進み、草むらに覆われていた所は瞬く間に階段となり、水溜りは溝を掘って流れ出るようにし、正面の林も湿地帯になるよう準備ができた。私達の作業を振り返ると、本職のような完璧さには欠けている。出来上がったものの、耐久性には自信のないものが多い。しかし、スクールハウスを真に自分達のものにしようと思っ立上った姿には、歩き始めという前向の姿勢を見出すことができると思う⁸⁹」

このサマーキャンプを実施したことによって、スクールハウスでの生活は、学生一人一人を生き返らせ、自分を取り戻させていった。そしてまた学生たちは自然の手ごわさを感じ取ったのではないだろうか。

フレーベルは『人の教育』の中で「人間と自然とは共に神から出て、神によって想定され、神の中に生存するということを教育、教授、教訓によって、人々に明らかに意識させ、そしてこれを実生活に於て悉く役立たせることは、教育全体の義務である⁹⁰。」といい、又、「神は絶えず創造し、間断なく働きたもう。神の考え給うところは凡て、仕事であり、行動であり、出産である。神の考えは悉く創造力をもって生産的、實現的に働き、仕事と行動とを創造しつつ永遠に進むものである⁹¹。」といっている。

私たちは、神から与えられた身体を生かし、知恵を働かせ、生活の中からあらゆるものを創り出していかなければならないのである。体を動かし、汗を流すことによって生みだされるもの、知恵を働かせて生みだされるもの、まわりの人たちとの話し合いによって、あるいは協

力し合うことによって生みだされるもの、人それぞれは何かを創り出していく。それぞれが与えられた賜物を生かしていくことが神の命令に答えていくことになるのではないだろうか。

ヨハネによる福音書第4章34節に「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」とある。私たち人間は神が創造された大自然の中に位置づけられた時に、神の作品としての自然に驚異し、自然の背後に在る創造者を認めることになるのだと思う。大自然の中に在る時、精神的あるいは肉体的な働きを懸命にする時に、私たち自身は有限なものであるけれども可能性が大きく開かれていることを感じるのである。「あらゆる労作は神への奉仕である⁹²」といわれていることを覚えていたいものである。

このように労作について考えると、スクールハウスでの生活は学生・生徒同志の親睦、学生と教師との親睦、自然との対決への目が開かれるという目的を十分に果たしていると思う。

前述の浅虫生活教室の感想文にあったような教師と生徒(学生)との断絶は作業を通して解消されると思うし、食事作りも、作業の一つとして自分たちで作ることになり、問題は解決されたと思うが、食事の時間は、以前と同じように全体のプログラムの外はとられてしまう恐れがある。そのために食事の前後の準備、あとかたづけの時間を作業の時間としてわり当てられる工夫がなされたわけである。この作業の時間は野外の場合もあるし、屋内の場合もある。例えば秋には自分たちが春に植えた小さな木の雪囲い、窓口の雪囲い、屋内では枕作り、床みがき、障子張り等、やるべき仕事はつきることがないのである。

大学のリトリートのプログラムは、開会礼拝で始まって閉会礼拝で終る。この間のプログラムはクラスごとに宗教委員が持ち帰って相談をして作り上げる。ディスカッションのテーマもそれぞれ工夫して提供され、話し合われる。キャンドルサービスはどのクラスでも成功している。ローソクの灯をみつめながら、教師や友人の話を耳を傾け、自分の内面へと目を向けるひとときである。

「リトリートの案内」で、宗教部はその年度のリトリートのねらいを訴える。これによって最近のリトリートを振り返ってみたいと思う。1979年のものを見ると、

「さまざまな高等学校から入学してきた諸姉は、本学がキリスト教主義大学であることを、入学式によって、あらためて自覚したことであろう。

本学における学生生活にあつて、このことは決して名目的なものではない。したがって、リトリートは、礼拝

の守り方、聖書の開き方、讃美歌のうたい方等、はじめてキリスト教に接する諸姉が、必要不可欠な指導を受ける機会である。もちろんそれだけではなく、新たに岩木山麓に建設されたスクールハウスの環境整備のために、さまざまな作業を実施し、これを通じて学生相互の友情の涵養に資する機会も作られるであろう。さらに、参加していただく諸先生方から専門研究の一端を披露していただいたり、人生のさまざまな体験を語っていただいたりして、夜の一時をすごすことになる。

そのように目的は三方面にわたるが、参加してみて、それらが渾然一体となった二日間となることは明確なことである。

そのために、各クラスごとに、宗教委員を中心にして、独自のプログラムを企画・立案・実施して欲しい。宗教部のスタッフはそれに対する助言は惜しまないことだろう。また、ことにあたる宗教委員の諸姉のために、研修会が良き訓練を先輩から受ける機会としてももうけられている。」宗教部は宗教教育を第一の目的としているが、英米文学科、日本文学科、家政科それぞれの専門を通して自分の存在価値、存在意義をはっきり把握して欲しいと願っている。

1980年の2、3年向けの案内では、「百沢にある弘前学院のスクールハウスは、建設当初の環境整備が一段落したので、今回からスクールハウスにおけるリトリートも従来のやり方から思想的・精神的・宗教的教育に転換することになった。それに伴って従来のリトリートの主題となっていた職業の問題、就職の問題、結婚の問題に関する話題から、広く人生一般の問題を取り上げる方向に進めていくことにする。

学生・教職員が参加する場合に共通の話題を得るために、各科が副読本を用いて参加者全員があらかじめ読んで来るようにしたい。いずれの副読本も「生と死」をテーマにしているものを選んだので、宗教的観点に立って問題を取り上げることが可能であろう。各クラスでは発題者を数名指定して、話題提供に一役を演じて欲しいと願っている。

D2 太宰 治著 『人間失格』

J3 堀 辰雄著 『風立ちぬ』

E3 ヘミングウェイ著 『老人と海』

1981年には、日本文学科3年は渡辺淳一の『花埋み』を通して「女性の生き方」を語り合ったのである。

1984年後期の案内には、「かつて、一度のリトリート体験を持つ諸姉にとって、一層充実したものを作り上げる心の準備はすでに充分であろう。諸姉の集団運営のコツが現場で充分に発揮されることを期待している。

キリスト教教育の一貫としての行事であることを認識

した上で、今回は更に、森林浴を通じて、自然保護をも考慮する機会としたら如何であろうか。スクールハウス建設にともなったさまざまな環境整備は一応完了したものと見て、これからは新たに自然を保護、保存する立場から、周辺を見なおして行きたいと思う。」毎年、春には新緑の、秋には赤いりんごのみのった高照神社から岩木山神社までの山道を歩き、森林浴を実行しているが、この年には特に中農林事務所林野課の職員に森林保護に関する講演、実地指導をしていただいた。また森林浴の効用についても学ぶことができたのである。

1984年の日本文学科3年のリトリートでは、「私の好きな宗教一心の拠り所」というテーマでディスカッションが行われた。感想文によると、

「このテーマをみるかぎりでは、J3B全員が生活の中で宗教と関わりを持っているかの印象を受けるかもしれない。しかし、実態はその逆。数名のクリスチャンはいるものの、無神論者が主流のクラスなのである。1年生のリトリートからキリスト教に反発し、『宗教なんて大嫌いだ』という過激な発言がなされ、キリスト者対無神論者の戦いと呼ぶにも等しい議論があったのだ。きっとその『戦い』を再度起こそうという思慮のもとに『私の好きな宗教』という主題が打ち出されたのではないかな、などと思うのは私の考え過ぎであろうか。宗教に異常に反抗的な人間の多い、今年のディスカッションのほんの一部だが公開しよう。やはり意見は、キリスト教は嫌いだという発言に始まった。『いったい神を信じて何になるのだろうか。自分の心の拠り所はキリスト教でも仏教でもない。自分が本当に悩んでいる時、苦しい時に手を差し伸べてくれるのは自分の家族であり、友人であるのだ。それなのに神にすがったりするのは、自分に対して甘えている様な気がするし、人間的に弱いのではないだろうか。』と、辛辣である。これでも1年生の頃と比較すれば柔らかくなったのだ。私自身もこの発言のあった彼女と同様の意見を持ち、1年生の頃は『キリスト教は大嫌いだ』と声を大に叫んでいた過激なメンバーの一人である。

——中略——

何事も信じるか信じないか、好きか嫌いかは本人の自由。私は決してクリスチャンではないけれど、本当に神が存在するのではと思うこともあるし、事実、聖書の中にキリストは存在し、今も多くの人に読まれているのだ。人間が切実詰った時、聖書の中から、得られるものがあるかもしれない。誰かが手を差し伸べてくれた時、それが神との巡り合わせと思える時があるかもしれない。」

このように、ある時には正面きって、宗教論をたたかわすことができる。自分たちが持っている疑問を素直に出すことができる自由がある。この自由さが今の大学には必要なのではないだろうか。

スクールハウスへの道は、岩木山に向ってアップロードを走る。春はりんごの白い花、秋は赤いりんごと黄金色の田圃の中を走る。この景色を見て、神は何とすばらしい自然を与えて下さるのだろうと思わない人はいな

いのではないだろうか。詩篇121篇「われ山に向いて目をあぐ……」私たち一人一人を創った神は、植物の一つ一つにも生命を与える。この神の計画を理解するために、心と思いを一つにして耳を傾けなければならないし、目を凝らさなければならない。神は私たちに物質面だけでなく、人生のあらゆる面で成功するように願っている。私たちが困難と思われる時に助けを与え、喜ばしい生命の息吹きを吹きこんで下さるのだということに気がつかなければならない。このことは1年、2年、3年のリトリートを通して十分に感じられるものである。スクールハウスでの労作はまだ必要である。隣接地の森をどのように活用していくかは、しっかりした青写真、長期計画に基づいて、実施していかなければならない。そこに学生、教職員がかかわっていくことによって「建学の精神」は自分たちのものになっていくのではないかと思うのである。

おわりに

弘前学院のこれまでの100年は、神の計画の中に着々と進行してきた。例えば、1859（安政6）年「日米修好通商条約」が批准され、宣教師が正式にわが国にやってきた年、津軽藩では優秀な人物を公費で江戸に留学させ、新知識を吸収させている。この本州の北の端である津軽地方の近代化は日本の近代化と同時に進められたのである。そして女子のための教育もまた1871（明治4）年、江戸から帰京し、東奥義塾を創設した菊地九郎によって、小学科女子部として始められている。これは日本の女子教育の草分けとして宣教師メリー・キダーが横浜にフェリス女学院を開設した一年後のことで、日本人として始められた女子教育の草分けではないだろうか。このことについては次の研究課題として置くことにして、今回は弘前学院の宗教教育、特にスクールハウスの歴史と意義にしばって述べてきた。

スクールハウスは多くの人々の祈りがあって建てられた。この秋、スクールハウスの隣接地の森を切り開き、「めぐみの森」の石碑を建てた。そして石碑の裏にスクールハウスの沿革を記したが、これはスクールハウスが弘前学院の建学の精神を示すものであることをその沿革を知ることによって、一人一人に自覚していただきたいためのものである。スクールハウスは、浅虫の地に建てられるまでさまざまな施設を借用して修養会という形で実施されてきたが、特にスクールハウスがたてられるきっかけとなったのは、元弘前学院宗教主事の山鹿素氏が弘前学院に赴任される前に遺愛女学院に勤務され、大沼にある遺愛女学院のスクールハウスが念頭にあったから

だと思うのである。しかし、山鹿素氏が弘前学院に赴任されてからも長い折りの期間があったのである。スクールハウスが建てられた頃は、弘前教会の受洗者は100名を越えて宗教教育はピークだったと伝えられている。「生活教室」は学生・生徒に建学の精神であるキリスト教の精神を深めさせ、教師と学生が話し合いによって相互の親睦をはかり、学校に早く親しませる事が目的であったが、初期においては、それまでの修養会がキリスト教信者を生んだようにかなり宗教色が強くキリスト教信者を育てることも考えられていたようである。これからの「リトリート」はマンネリに陥いることのないように、大学としての目的を再確認しあい、学生の希望にも答えられるように、前段階のオリエンテーション、打ち合わせを密にすることが大切であると思う。

キリスト教主義教育が始められたのは少数教育においてであった。当初は外国の援助によるものが多かったし、あるいはキリスト教信者たちの寄付によって請われてきたのであるが、現在は採算性を考えてマスカ化が進んでしまっている。そういう中にあって私たちは、少人数の教育を試みているのである。スクールハウスにおいて寝食をともにし、話し、作業をし遊ぶ、肌と肌とのふれあいを大切にしているのである。ともすれば宗教教育は隅に追いやりられそうになる中で、どうしたらこれを守り通すことができるのであろうか。

キリスト教主義学校の教育方針は、青山学院の教育方針でもある「キリスト教信仰のもとづく教育をめざし、神の前に真実に生き、真理を謙虚に追求し、愛と奉仕の精神をもってすべての人と社会とに対する奉仕を進んで果す人間の形成を目的とする⁴⁴⁾」ものでなければならないと思うのである。この教育方針は聖愛高校の『信仰（正義）・愛・奉仕（献身）』にも通ずるものである。本学としてもこのことは、はっきりと明記すべきだと思うのである。

100年の間、キリスト教主義教育をしてきたということに安住することなく、弘前学院が存在しなければならない自己の存在理由を明確にする責任があると思うのである。

引用文献・参考文献

- 七十五周年史編委員編『遺愛七十五周年史』
遺愛女子高等学校 昭和35年版
青山学院『編青山九十年史』青山学院 昭和40年版
フェリス学院100年編集委員編
『フェリス女学院100年史』フェリス女学院 1970年版
東洋英和女学院百年史編纂実行委員会編
『東洋英和女学院100年史』東洋英和女学院 1984年版
『弘前女学校歴史』弘前女学校 1927年版

笹森順造編『東奥義塾再興十年史』

東奥義塾学友会 1931年版

八十周年記念誌編集委員会

『弘前学院創立八十周年記念小誌』弘前学院 1967年版

弘前学院九十年史編集委員会『弘前学院九十年史』

弘前学院 1976年版

弘前学院創立百周年記念事業協賛会

『弘前学院の100年』

弘前学院 1986年版

前田喜代治著『みちのく双書第四集青森縣教育史』

青森県文化財保護協会 昭和32年版

『弘前市教育史 上巻』

昭和50年版

古田十郎著『山鹿元次郎小伝』 印文社 昭和41年版

船水潔著『ここに人ありき 1』

陸奥新報社 昭和45年版

海老沢有道・大内三郎共著『日本キリスト教史』

日本基督教団出版部 1977年版

土肥昭夫著『日本プロテスタント・キリスト教史』

新教出版社 1980年版

宮本武之助先生喜寿記念論集編集委員会『キリスト教と教育の接点』日本YMCA同盟出版部 1982年版

小原國芳著『塾生に告ぐ』

玉川大学 昭和53年版

小原國芳著『玉川塾の教育』 玉川大学 昭和53年版

フリーベル著・小原國芳訳『人の教育』

玉川大学 昭和47年版

小林澄兄著『労作教育思想史』玉川大学 昭和46年版

『キリスト人名辞典』日本基督教団出版局 1986年版

○新聞・雑誌

青山学院宗教センター「Wesley Hall News No. 8」

1986年6月30日

キリスト新聞「キリスト教主義学校特集 1 キリス

ト教主義学校教育を考える」 1986年9月27日

陸奥新報

1986年9月16日～27日

「弘前学院の歩み—キリスト教教育100年」

東奥日報

1986年9月10日～12日

「弘前学院一世紀の歩み」

弘前学院宗教部編「弘前学院キリスト教教育のしお

り」

1968年版

弘前学院聖愛中学校・高等学校教職員手帳

1969年度～1980年度

弘前学院聖愛高等学校教職員手帳

1981年度～1986年度

(本稿は、1986年3月13日、日本基督教学会東北支部学術大会において発表したものに補筆しものであることをおことわりする)

注

(1) 1986年度弘前学院大学・弘前学院短期大学『学生便覧』5頁。

(2) 『弘前学院90年史』あとがき。

(3) 『日本キリスト教史』146頁、150頁。

(4) Mary Eddy Kidder 1834年1月31日 アメリカ・バーモント州ウォーズボクスに生る。1873年7月E・ローゼ・ミラーと結婚、1910年逝去。

(5) 『フェリス女学院100年史』26頁、32頁。

(6) キリスト教新聞、1986年9月27日版「婦人宣教キダーと女子教育」。

(6') "For others" はフェリスのモットーである。目に見えない神への愛を目に見える隣人への奉仕を通して表わす。

(7) 『青山九十年史』218頁 (Thirty-fifth Anniversary Catalogue of Aoyama Jo Gakuin, 1874—1909, p.12)

(8) W. F. M. S. (Woman's Foreign Missionary Society) 1869 (明治2) 年、ボストンに設立さる。

(8') Mrs. Caroline R. Wright ドイツ駐在の米国公使夫人。

(9) ミス・メアリ・ハンブトン、ミシガン州アルビア大学を卒業、翌年28才で来日、遺愛の創立に貢献し、同校第二代校長となる。以後35年遺愛に勤続。

(9') 東奥義塾の歴史は津軽藩学稽古館までさかのぼる。1859 (寛政6) 年、当時の藩主津軽寧親公が御用掛山崎図書らに命じて創立されたものである。(学科—経学、兵学、紀伝学、和紀学、天文学、数学、法律学、書学、蘭学)。

安政6年、藩主承順公が蘭学館を新設、公費で稽古館の生徒を江戸に留学させ新知識を吸収させた。

1871 (明治4) 年、藩主の命によって天下の名士との交わりを得た菊池九郎が、本県の将来のために育成事業の必要を痛感、帰郷してを英語教師吉川泰治郎とともに廃校寸前の稽古館建てなおしを承昭公に具申し、承昭公からの多額の寄金によって東奥義塾として明治5年11月27日開校する。明治8年、博覧書院と称する図書館を設け、一般公開する。同年4月小学校女子部を設ける。将来の良母たるべき教育を行ったが、これは本県的女子教育の草分けである。

(年月日不明、陸奥新報『東奥義塾再建35周年を迎える』から抜粋)

(10) 本多庸一。旧日本メソジスト教会初代監督、教育者。津軽藩士の長男として青森県弘前市に生まれる。幼時から孝経、漢籍を習い、藩校稽古館では陽明学、蘭学、英学に関心を持ち、1870年藩命により横浜に留学、バラ塾に入って英学を修め、キリスト教に会う。1872年バラより受洗。創立直後の基督横浜公会に加わり、横浜バンドの一員となり、1874年弘前にもどり1875 (明治8) 年弘前基督公会を設立した。(キリスト教人名辞典より)

(11) 山鹿元次郎は牧師であり教育者である。津軽藩江戸藩邸に生まれる。父は同藩小習役古田克広。10才のとき山鹿家の養子となる。東奥義塾に学び、J・イングや本多庸一らの指導を受け、1875年イングより受洗し弘前教会の設立に加わる。(キリスト教人

名辞典より)

- (12) 『弘前女学校歴史』11頁。
- (13) 弘前女学校はこの時、尋常小学科、高等小学科及び本科(3ヶ年)を置いた。
- (14) (12)と同じ14頁。
- (15) 『山鹿元次郎小伝』120頁。
- (16), (17)『遺愛七十五周年史』59～62頁。
- (18) (12)と同じ9頁。
- (19) (12)と同じ35頁。
- (20) 1899年8月3日文部省訓令第12号「一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス。依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ」
- (21) (12)と同じ123頁。
- (22) 『弘前学院八十周年小誌』142～143頁。
- (23) (2)と同じ88頁。
- (24) (22)と同じ103頁。福地(白取)清枝の思い出。
- (25) 『みぎわ』1号, 15頁。高3 C 高山千鶴子。
- (26) 宗教部機関紙「たてごと」第10巻4号(通算47号) 1978.12.10。
- (27) 『塾生に告ぐ』p.45～46, 『玉川塾の教育』221頁。
- (28) 「たてごと」第10巻第3号(通算46号) 1978.10.5。
- (29) (28)と同じ。斎藤留美子の感想文から。
- (30) フレーベル著『人の教育』5頁。
- (31) (30)と同じ, 37頁。
- (32) 『労作教育思想史』268頁。
- (33) 「たてごと」第16巻第2号(通算67号) 1984.2.6 木村道子。
- (34) “Wesley Hall News” 1986.6.30。